

令和6年度 研修会主題に迫るための視点

視点①

子どもが自ら問いを見だし、主体的に学び続けることができる単元づくり

視点①では、「単元を見通す学習問題」を柱にしなが、どの子ども主体的に学ぶことができるような単元づくりをし、子どもの学びと変容を、具体的な子どもの姿から検証することを大切にする。

・子どもの問いを大切に単元を見通す学習問題をつくる場面

生活経験・既習事項など子どもの実態を踏まえて、導入を工夫し、それらと異なる事実と出合うことで生じる子どもの問題意識を大切に「単元を見通す学習問題」をつくる。その際、子どもの意外性を導き出したり、既存の知識や認識とのズレを生かしたりしながら「単元を見通す学習問題」をつくるためには、子どもの生活経験やそれまでの学びを丁寧にみとり、子どもが主体的に学習に取り組めるように教材を選定し、単元を構想することが大切である。

・子どもの予想と見通しを大切に学習計画をつくる場面

「単元を見通す学習問題」を解決するためにはどのような学習が必要か、予想をもとに数時間先の学習計画を子どもたちと立てて、問題追究をしていく。そのためには、子ども一人ひとりの考えや学習状況・興味関心等をみとり、それを生かして、子ども主体で学習が進んでいくような手だてを考えていくことが大切である。

・社会的事象の意味等に迫る本気の学習問題をつくる場面

主体的に学習が進んでいくと、子どもたちの追究意欲は更に高まってくる。その中で、矛盾を感じる社会的事象に出合ったり、友達と意見が違ったりして子どもの思考が揺さぶられることで疑問が深まり、「本気の学習問題」が成立していく。「本気の学習問題」はこれまでの学習過程を生かすことができること、子どもの実態に合った学習問題になることが大切である。そのために、子どもたちの問題意識をみとり、それを生かしてどの子ども主体的に解決をはかりたいような学習問題をつくることができるように手だてを考えていくことが大切である。

・自らの学習を振り返る場面

単元の中で、必要に応じて、計画を見直したり修正したりしながら自らの学習を調整する場面や、単元の終末に学びを振り返り、社会生活に生かしたり、選択・判断したりする場面を意図的に設け、子どもが自らの学習を振り返り、学んだことや成長できたことを実感できるように手だてを考えていくことが大切である。

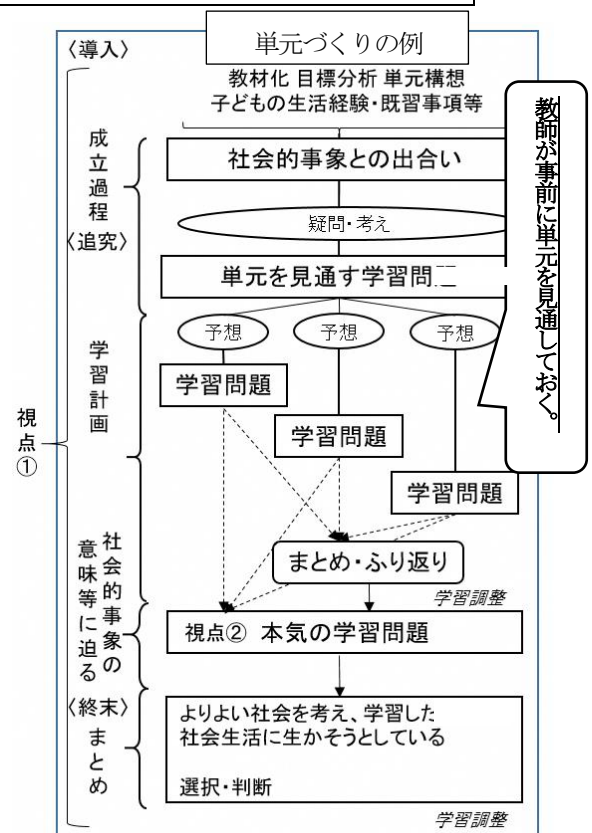
《視点①について、研修会を通して吟味する点》

・子ども一人ひとりのみとりを生かして行った手だてによって、どの子ども主体的に学び続けている単元になっていたか。

(手立ての例) 教材吟味 主体的な学びをつなぐ単元構想図や資料計画 ふり返りの分析 児童の実態把握など

(検証方法の例) 資料や発問の整理分析 実際の流れの検証 抽出児を設定し変容を検証

一人ひとりのふり返り一覧から検証など



【留意する点】

※単元を見通す学習問題…子どもが主体性をもって取り組む場面をスタートする学習問題。学習計画を立て、子どもが2時間先、3時間先を見通して調べたり考えたりできるようにする。

視点② 個を生かし、協働的に学びを深めることができる授業づくり

視点②では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図りながら、子どもの思考がより多角的なものになるように、毎時間の目標や評価に応じた協働的な学びが行われる授業づくりを目指していく。問題解決に向けた個の学習の充実が図られ、個の学びについてみとったことが授業の中で生かされ協働的に学びを深めていくことができる学習展開になっていたかを子どもの姿から検証していくことを大切にする。

・学習指導要領の内容との整合性を図る

子どもと何を考えていくのかを具体的に想定しておくことが重要である。その際に、取り上げる社会的事象は、子どもの実態や学習指導要領に沿うものであるのかの整合性を図ることが大切である。

・個の学びが生かすためのみとりを基にした手だての具体化

子どもの追究意欲の高まりと教師のねらいのバランスを大切にした「本気の学習問題」を追究することを通して、子どもたちがそれぞれの生活経験や学びをもとに、協働的な学びの中で社会的事象の意味等に迫ることができるようにすることが大切である。そのためには、問題解決に向けて、一人一人の学習状況を適時教師がみとり、個の学びが生かされるような協働的な学習が行われるように、意図的に展開していくことが大切である。

・社会的事象の意味等に迫っていく場面における教師の手だて

子どもたちが協働的に学んでいき、問題を追究していく際、教師は子ども一人ひとりが学習問題に対して、どのような考えをもっていたり、新たにどのような資料を求めていたりするのかをみとり、授業展開を考え、子どもたちの協働的な学習を支えていくことが大切である。社会的事象の意味等に迫っていくために教師は更なる手だてを講じる必要がある。その手だてとしては、資料提示、板書問い返し、発問などである。これらの手だてを、子どもの思考の流れをみとり、適切に行っていくことが大切である。

《視点②について、研修会を通して吟味する点》

- ・子どもたちの実態に沿い、問題意識のもとに成立した学習問題になっているか。また、その学習問題が協働的な学びを通して社会的事象の意味等に迫るものになっていたか。

(検証方法の例) 前時や本時の授業記録分析 学習問題に対する子どもの考えのみとり など

- ・教師の指導性(手だて)は個別最適な学びと協働的な学びを一体的に実現するために有効であったか。

(手だての例) 座席表 資料提示 板書 問い返し 発問 振り返り など

(検証方法の例)

実際の資料の検証 板書の検証 授業記録(一人一人の児童の発言が分かるもの) 分析など

